

第3章－2 Aブロックの研究のまとめ

Aブロック

大阪市立御幣島小学校（公立）・学校法人御幣島学園認定こども園御幣島幼稚園（私立）
社会福祉法人みおつくし福祉会香簍保育園（私立）

【ブロックテーマ】

「子どもの良さをつなぐ連携・接続

～互いの保育・教育を知り、創意や工夫を取り入れ、子どもとの関わりに活かしていく～」

【指導助言】 関西国際大学 棕田 善之 准教授

1 研究の方法

(1) ブロックの現状と課題

例年1～3月頃、保育園、幼稚園の5歳児が小学校を訪問し1年生と交流をしていたが、コロナ禍になり交流は中止していた。各就学前施設の子どもたちは、御幣島小学校を含む複数の小学校に就学する。

＜ 就学前施設が感じている課題 ＞

- ・子どもの身体の育ちや、家庭の子育て力が昔とは違ってきている。スマートフォン、テレビ等への依存も感じる事が多い。生活習慣やしつけの部分も就学前施設に委ねられていると感じている。
- ・小学校では担任の先生と直接話す機会が少なくなるので、低学年の間、保護者が不安をもつことが多い。

＜ 小学校が感じている課題 ＞

- ・少子化の影響か、自分のことが自分でできない子どもが増えている。
- ・小学校と幼稚園・保育園の1日の枠組みが違うので、入学当初は45分間座っていることが難しい。入学後しばらくの間、小学校になじめない子どもがいる。
- ・就学前施設と保護者、小学校と保護者の距離感の違いが大きい。

(2) テーマ設定の理由

教職員同士、子ども同士の交流を深め、互いのことをよく知り、互いの良さを教育に取り入れていきたいと考え、研究テーマを「子どもの良さをつなぐ連携・接続～互いの保育・教育を知り、創意や工夫を取り入れ、子どもとの関わりに活かしていく～」とした。

(3) 取組内容

- ・子どもも教職員も知り合うことで、安心感を育む。
- ・互いの教育・保育や、子どもの様子を参観し合うことで理解を深める。
- ・子どもの良さを就学前施設から小学校へ引継ぎで伝えるようにし、それをどうつなげて活かしていくのかを考える。

(4) 取組計画

R4年度 取組内容		R5年度 取組内容	
4月		4月	4/28 2年生と5歳児との交流打合せ
5月	5/11 事業説明・顔合わせ・ブロック会 5/31 御幣島小学校見学・交流会	5月	5/1 入学後の意見交換会 5/16・18 2年生と5歳児との交流
6月	6/23 御幣島幼稚園見学・交流会 6/27 棕田先生による教職員学習会	6月	6/12 2年生と5歳児との交流振り返り、指導助言
7月	7/15 香簍保育園見学・交流会	7月	
10月	10/28 香簍保育園見学、指導助言、学習会	10月	10/13 5年生と5歳児との交流打合せ 10/27・31 5年生と5歳児との交流
11月	11/28 御幣島幼稚園研究保育、指導助言、討議会	11月	11/20 5年生と5歳児との交流振り返り
12月	12/2 御幣島小学校研究授業、指導助言、討議会 12/13 小学校紹介の動画撮影 12/19 香簍保育園研究保育、指導助言、討議会	12月	12/25 指導助言
1月	1/30 研究会、指導助言	1月	1/12 指導助言
2月	2/8・22 5年生と5歳児とのリモート交流 2/28 交流振り返り、次年度に向けて	2月	2/6・19 5年生と5歳児とのリモート交流

2 主な取組

【1年目の取組】

(1) 教職員学習会

【子どもの良さをつなぐ連携・接続に向けて】

「遊びに関する実証データ」をもとに、子どもの主体的な遊びは多様な発達に有効で、全ての子どもの遊びには意味があること、乳幼児期には、見たり、聞いたり、触ったりなど五感を通して得た経験が大切で、その後の学習に大きく影響することを学んだ。それらの重要性を踏まえたうえで、乳幼児期と小学校教育の違いや特徴をお互いに関心することから始めてみては、と提案をいただいた。

子どもは頭の中で考えながら遊ぶが、全てがうまくいくとは限らず、失敗することもある。しかし、その失敗は大切で、失敗した経験から仮説を立てたり、考えたりすることが思考の基礎となり、遊びを通して養われ、小学校での学びにもつながっていくことを学んだ。就学前施設は「この遊びは、小学校ではどのような学びにつながるのか」と考えながら保育をすること、小学校は「就学前施設での遊びの経験を、どの授業につなげていけるのか」と意識していくことが大切だと課題提起していただいた。就学前施設と小学校の教職員がそれぞれをよく知り、歩み寄れるところを見つけていくこと、子どもを中心に、子どもたちが安心できる環境づくりをすることが重要であると学んだ。

次にアプローチカリキュラムについて、事例を通して学んだ。例えば、物の数を数えることについて、子どもが気付いたり、より正確に数える方法を考えたりする過程が大事であること、子ども自身が思いや考えを深められる関わりを考えて保育することが大切であると学んだ。保育者は遊びのねらいをもちつつ、子どもが主体的に活動できるように、子どもが自ら関わり、遊びが始まるまでの過程を見逃さないように援助することが大切だとお話された。

< 今後の取組へのアドバイス >

- ・まずは教職員間・施設間の交流から行い互いを知ること。
- ・子ども理解をする ⇒ 子どもの声に耳を傾ける。

< 学習会に参加した教職員の感想 >

◇ 小学校 ◇

- ・それぞれの発達段階を意識した、カリキュラムの大切さを学んだ。特に、小学校に入学して間もない時期は、生活科を学習のメインにするという提言は、子どもたちのためにも魅力的に感じた。
- ・幼児教育の学びの形態「学びの芽生え」にカルチャーショックを受けた。幼児教育と同じようにはいかないが、「楽しいこと、好きなことに集中することを通じて学んでいく」という、子どもたちの積極的な姿勢を小学校に入学してからつぶしてしまわないように、子どもたちの不安感を少しでも和らげるように心がけ、小学校の学習へつなげていきたい。

◇ 就学前施設 ◇

- ・保幼小の連携ではまず互いを知ること、交流することが大切だということを学んだ。交流することで小学校への不安が軽減し、期待も膨らむと思う。お互いに理解し、歩み寄ることで子どもたちが安心できる環境を整えていきたい。
- ・子どもの遊びには意味があること、発達と大きな関わりがあることを改めて知る機会になった。保育園でも「主体的に遊ぶ 自分がしたいことを見つけて遊びを展開していく」ことを大切にしているので、保育を振り返ることができた。主体的に遊べるような保育者の関わりを意識し、子どもたちが自分から関わり、遊びが始まるまでの過程を大事に見逃さないようにしていきたい。



(2) 研究保育・研究授業

① 施設見学・教職員交流（4回実施）

5月～10月に互いの施設を見学し合い、教職員間・施設間の交流を行ってお互いを知り合うこととした。日々の保育・教育で気を付けていること、大切にしていることや施設の環境などについて話し合うことができた。また、小学校の担任教諭も参加しやすい放課後の時間帯にも実施したことで、互いの良さや違いを話し合い、教職員同士が顔見知りになり、身近に感じることができ交流が活発になった。



② 研究保育 御幣島幼稚園5歳児（令和4年11月28日）

ねらい：クリスマスに興味をもち、友達と話し合いながら制作を楽しむ

活動内容：「クリスマスブーツ」制作

子ども同士の会話にクリスマスの話題があがり、プレゼントを楽しみにしている様子なので、保育室の壁面を「クリスマスブーツ」で飾ることにした。

どんなデザインにするかを子どもたちが考え、自分で型をとって、はさみで切ったり、マーカーで模様を描いたり、スパンコールや綿などを貼ったりしながら楽しんで取り組んでいた。友達と相談しながらつくったり、自分が工夫したことを小学校や保育園の先生に一生懸命に伝えようとしたりする姿も見られた。討議会では、椋田先生から設定保育の中にある学びの芽生えを、大人が実感していくことが大事であるという助言があり、



保育者の思い通りに進めようとし、方向性を見失わないようにすることを心に留め、日々の設定保育を見直していく必要があると感じた。自由な遊びと設定保育との中で育つことを保育者がよく理解し、日々丁寧に子どもと関わるように心掛けた。

③ 研究保育 香簍保育園5歳児（令和4年12月19日）

ねらい：クリスマスの制作を友達とやり取りしながら楽しむ。

活動内容：コーナー遊び

朝の会で、本日のスケジュールやクリスマス制作の帽子づくりの説明を行い、その後室内で、自分たちのしたい活動をして遊ぶ。帽子づくりもコーナー保育のひとつとして設定し、その他、ままごと・積木・お絵描き・ゲーム遊びなどのコーナーも準備する。

討議会では、「制作も一つの遊びとして、一斉に取り組むのではなく、したい子どもから行っていたことが子どもの主体性につながると感じた」「集中して絵をかいたり、つくったりして、継続して遊び込んでいる様子が分かった」などの感想が寄せられた。



椋田先生の助言からは、制作コーナーではそれぞれが自分で考え主体的に活動していたことや、出来上がった帽子をかぶって鏡を見ながら友達と見せ合う姿は、対話をしながら互いの作品を認め合う5歳児ならではの育ちであり、また、遊んでいる中で自分の思いと違うことにぶつかり「どうしたらいいのか」「こうしてみよう」などと考える思考は、学びへとつながっていくことを学んだ。遊びの様子から、「遊び込める子どもは学び込める子どもになる」「自分で遊

びを見つけて『この遊び面白い』『こうやってみよう』など夢中になる経験をたくさんすることが、就学後の学習でも集中することにつながっていく」と学んだ。

④ 研究授業 御幣島小学校2年（令和4年12月2日）

2年3組生活科「うごく うごく わたしのおもちゃ」

目標：動くおもちゃの様々な遊び方を試しながら、みんなでより楽しく遊べるように遊び方やルールを工夫することができる。

「ふくろロケット」「ぱちんジャンプ」など6か所のおもちゃグループに分かれ、遊び方やルールの工夫について話し合った。そして「ひらめきコーナー」



には、色画用紙や段ボール、カラーペンなどの制作材料がたくさん揃えられ、グループの話し合いでは各班でまとめた遊び方やルールをすぐに試すことができるような仕組みがあった。明確な指示、考えられた場の設定によって、児童が自ら考え協力しながら、いきいきと活動する様子が見られた。

参観後の討議会では、就学前施設と小学校間の意見交流を行った。特に、生活科の研究授業は、保育内容との共通点も多く、今後の連携のヒントとな

る有意義な話し合いをもつことができた。また、多くのクラスを参観する中で、保育園と幼稚園の卒園生の成長した姿を見ることができ、久しぶりの再会に、児童からも笑顔があふれていた。椋田先生からは、アクティブラーニングにおいて過去の経験を活かそうとする子どもの姿を認めること、就学前施設と小学校の連携が学習意欲の向上にもつながってくることなど、様々な指導助言をいただいた。

(3) 動画を撮影して小学校のことを知り、Teams で交流しよう（令和5年2月8日、22日）



就学前施設の5歳児から、「小学校ってどんなところ？」

などたくさんの疑問があがったので、12月に就学前施設の教職員が小学校を訪問して、学校内を動画撮影した。不安に思っていた子どもも、教室の机や椅子、授業の様子、校長先生や先生方の話、給食の様子等の動画を見ることで、イメージできたようだった。動画を

見た後で、5歳児が小学校進学に向けて不安に思っていることや知りたいことを話し合う時間をもち、5年生への質問を考えた。

Teams 交流当日は、5歳児は少し緊張した様子だったが、「忘れ物をしたらどうするの?」「牛乳は毎日出るの?」など聞きたいことを質問した。5年生の児童に優しく、分かりやすく教えてもらい、5歳児も自然と柔らかい表情になった。不安に思っていたことが心配しなくて大丈夫であることが分かり、小学校進学を楽しみにする姿が多く見られるようになった。また、画面を通じての交流が初めてだったので、5歳児は自分たちや小学生が画面に映っているのを見るだけでも驚いた様子だった。コロナ禍ならではの交流ができ、子どもたちや教職員にとっても良い経験ができた。



小学校では、オンライン交流での質問に答える担当を決めるときも、たくさんの児童が希望した。担当に決まった児童は大喜びで、5歳児に分かりやすく伝えるように、オンライン交流に向けて何回もセリフの練習をしていた。当日も、程よい緊張感をもちながら「小学校に、おもちゃはあ



りますか?」「ハンドサインって何?」などの質問に、クラス全体がわくわくしながら楽しく交流することができた。交流後は、「めっちゃ、かわいかった。」「〇〇の弟、おったなあ」と話している児童が多く、4月から新入生を迎えることを楽しみにしている様子だった。

【1年目の成果と今後の課題】

○ 1年目の成果

- ・幼児教育は経験カリキュラム（「遊び」を通して学ぶ）、小学校教育は教科カリキュラム（教科等の目標に向かって計画的に学ぶ）という大きな違いを理解できた。
- ・教職員同士が、互いの施設を参観することで、それぞれの良さや違いを知り、保育園や幼稚園等の「遊び」が小学校生活につながる大切な活動であることを実感できた。

- ・1年目は、相互施設訪問、学習会、討議会、活発な意見交流会等を複数回行ったことで教職員相互の関係が深まり、来年度に向けての連携がしやすくなった。

○2年目への課題

- ・子ども同士の交流は、今年度はオンライン交流のみだった。今後に向けて、コロナ禍に配慮した子ども同士の相互交流の仕方を考えていく。

【2年目の取組】

(1) 2年生と5歳児との交流（令和5年5月16日、18日）



御幣島小学校といえば、芝生広場である。その芝生広場に親しみをもってもらうために、御幣島小学校の芝生広場で、2年生と香簍保育園・御幣島幼稚園の5歳児クラスとの交流授業を行った。題材名を「なにをみつけたかな」とし、芝生広場の動植物に関する「ビンゴゲーム」をしながら、児童と園児3～4名の班ごとで活動した。

グループ分けの後、グループ内で自己紹介をした。その後、小学校で使っているハンドサインを紹介し、園児たちはハンドサインをよく見ながら、立ったり、座ったりをととても上手にすることができていた。児童も園児も初めは緊張の面持ちだったが、「ビンゴゲーム」をする中で、徐々にお互いの距離を縮めていった。

< 交流前の様子 >

《2年生》

- ・保育園や幼稚園から先生や園児が来てくれることに、「めっちゃ、楽しみ」「知ってる友達おる」など、待ち遠しい声が聞かれた一方で、芝生広場を案内するという重大なミッションに、「ドキドキする」「大丈夫かな」という声も聞かれた。

《5歳児》

- ・芝生広場に到着した時に知っている児童の顔を見つけ、安心した表情になっていた。
- ・うれしすぎて、テンションがあがり、はしゃいでいた。

< 交流中の様子 >

《2年生》

- ・園児とはぐれないように、しっかりと手をつなぎ「こっちやで」と優しく声をかけたりしていた。
- ・交流授業に不安を感じている児童もいたが、園児が見つけた虫が何か、生き物ブックを見せてコミュニケーションを取ることで、楽しく活動していた。
- ・ビンゴゲームのクイズで、芝生広場のシンボルツリー「桜」の名前を答える問題では、「春になったら、ピンク色の花が咲くよ」「3文字だよ」など、自分なりに考えてヒントを出している微笑ましい場面も見られた。



《5歳児》

- ・花や虫、木の実など、芝生広場の様々なものに興味を示し、とても楽しそうにしていた。
- ・2年生の児童が同じ目線でダンゴムシと一緒に探してくれたことで、しだいに心を開いていき、打ち解けることができた園児もいた。
- ・ダンゴムシに興味のある園児は、自分から「ダンゴムシを探したい」と児童に話し、一緒にダンゴムシを探しに行く場面も見られた。

< 交流後の様子 >

《2年生》

- ・事後の感想では、「かわいかった」「ありがとうと言ってくれた」「園に、遊びに来てねと言われ、嬉しかった」など、書いていた。
- ・6月になってから生活科の学習で芝生広場に行くと、ビンゴゲームの問題になっていたビワの実が、緑からオレンジ色に変化していた。「あの時(交流時)は緑やったのに、オレンジ色や」と懐かしそうに話していた。その後の算数科のひき算「36-24」の問題では、教室で実物のオレンジ色のビワを使い、36個から24個を取る場面を見せることで、いつも以上に興味をもち、意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・保護者から「とても楽しんでいて、良い経験をさせてもらった」という声が多数聞かれた。

《5歳児》

- ・園に戻ってから、児童が手を挙げ発表するのを真似て「小学校ごっこ」と言って楽しんでいた。
- ・アゲハチョウを飼育していた園では、帰ってから、「ミカンの木にアゲハおるねん」と、ビンゴゲームをしたことが知識となっているようだった。
- ・子どもから交流の話を聞いた保護者からは、「不安なこともあるが、このような機会があって良かった」との感想が聞かれた。

◎ 芝生広場

花壇・植え込み	
植え込み	オブジェ 
	花壇 花壇
	花壇 花壇
	花壇 花壇
	花壇 花壇
	花壇 花壇
	花壇 花壇
	花壇 花壇
	花壇 花壇
	花壇 花壇

◎ ビンゴカード

なにを みつけたかな ビンゴゲーム		
はん	月	日
ピンクいろ のはな	しろいろの はな	アゲハの ようちゅう の たべもの
みどりいろ のはっぱ	クイズ きの なま え ()	むし
きいろの はな	むらさきい ろのはな	みの なる き 木

(2) 5年生と5歳児との交流（令和5年10月27日、31日）

入学した1年生が、一番身近に接することの多い学年は6年生（現5年生）である。その5年生との交流を深めることで、小学校生活への期待を高めることができるように、御幣島小学校の講堂で、5年生と香簾保育園・御幣島幼稚園の5歳児との交流会を行った。

交流会では、16チームのグループに分け、自己紹介をした後、5年生が主体となって進行役となり、「王様じゃんけん」「御幣島小学校〇×クイズ」「じゃんけん列車」の3つのゲームを行った。

児童も園児も会が進むにつれ、一緒に喜び合う姿や相談してクイズを解く姿が多く見られ、45分という短い時間の中で子どもたち同士の関わりがしっかりともてたように感じた。



< 交流前の様子 >

《5年生》

- ・「園児に、『楽しかった！』『早く小学生になりたいな』と思ってもらえるような、楽しい交流会にする」という目標をもち、どんなクイズにしたらおもしろいか、どんなルールにしたら安全かなど、子ども同士で意見を出し合い、考えることができていた。

《5歳児》

- ・春にも行ったことがある学校なので安心しており、高学年のお兄さんやお姉さんと遊べるのがとても嬉しい様子で、交流会を楽しみにしていた。

< 交流中の様子 >

《5年生》

- ・児童は、園児と話をする際にしゃがんだり、姿勢を低くしたりして目線を合わせて話をする姿が見られた。また、なかなか話せない子には、「一緒に言おうか？」などとサポートする姿も見られた。
- ・園児が楽しく過ごせるように、じゃんけんに出た園児には、「惜しかったね」「次もあるから頑張ろう」と前向きになる言葉かけをする姿が見られた。



《5歳児》

- ・最初は緊張した様子も見られたが、児童が教えてくれたり、褒めてくれたりしたことで緊張もほぐれ、時間とともに笑顔が見られるようになり、楽しく活動していた。
- ・普段は園の年長としてお世話をすることも多いが、5年生と関わり、少し甘えた姿や、恥ずかしがりながらも分からないことを教えてもらおう姿等、いつもと違った一面が見られた。

< 交流後の様子 >

《5年生》

- ・「楽しかったと言われて頑張った甲斐があった」「また一緒に遊んでお世話をしあげたい」「小さい子は苦手だったけど、お世話をすることつを学べた」等、様々な感想をもてた様子で、来年、自分たちが一番上に立って下級生をリードするという自覚ができた。

《5歳児》

- ・園に帰ってからも、「楽しかった！」「じゃんけん列車がまたしたい」「5年生は大きかったけど優しくかった」と話しており、早く小学生になりたいという気持ちが高まった様子だった。

保幼小連携・接続 生活科学学習指導案

- 1 日 時 令和5年5月16日(火)第2時限(9:40~10:25)
5月18日(木)第2時限(9:40~10:25)
- 2 学年・組 御幣島小学校 第2学年 1組 在籍35名、2組 在籍35名
香簍保育園 5歳児クラス らいおん組 在籍25名
御幣島幼稚園 5歳児クラス まつ1組 在籍25名、まつ2組 在籍25名
まつ3組 在籍23名、まつ4組 在籍25名
- 3 場 所 御幣島小学校 芝生広場
- 4 題 材 名 「なにを 見つけたかな」
- 5 目 標
- 小学校の芝生広場で、動植物の「ビンゴゲーム」をすることで、児童と園児の交流を深め、園児に小学校への期待感をもたせる。
- 6 展 開

子どもの活動	指導者(保育者)の支援		
	御幣島小学校	香簍保育園	御幣島幼稚園
○ グループ分けをして自己紹介をする。	○ 困っている児童には声かけをする。 ○ クラスのハンドサインなども紹介し、2年生が手本になるように伝える。	○ 戸惑う姿や気持ちが高ぶる姿が予想されるので、個々の様子に応じて声かけをし、安心して参加できるようにする。 ○ 発言が苦手な園児には友だちや保育士と一緒に伝えられるよう促す。	○ 事前にハンドサインを伝え、園庭の草花を子どもたちと一緒に観察する。
しばふひろばで 虫や花を 見つけよう！			
○ 「ビンゴゲーム」のルールを知る。	○ カードは2年生が持つこと、見つけたものは、必ず班の全員で共有することを伝える。	○ 話を聞く中で、困っている様子がみられたら、個々の理解に合わせて、話の内容やゲームのルールなど伝える。	○ ビンゴカードを見せて何を見つけたのかどのようなルールなどを伝え興味を促す。
○ 「ビンゴゲーム」をする。	○ 班の全員がいるかを確認しながら活動し、迷子が出た場合は、近くの教員に知らせることを確認する。	○ 児童と園児の関わりを見守りつつ、ゲームを通して気付いたことに共感し、分からないことは児童に聞くように知らせるなど、より交流が深められるように声かけをしていく。	○ 何か困った事があれば2年生や保育者に声をかけるよう伝える。
○ 班で交流する。	○ 児童や園児の気付きや発語を、班で共有できるように支援する。 ○ 意見交流が活発ではない班には、もう一度カードを見るように促す。		○ 意見が言えない子どもには保育者が仲立ちをし、助言する。
○ ふり返りをする。	○ 一緒に活動をして、楽しかったことや嬉しかったことも、伝え合うように声かけをする。 ○ 交流をして、感じたことを発表してもらうようにする。	○ 活動をふり返る中で、楽しかったことなど自分の思いを言葉で伝え合う様子を見守る。個々の様子に合わせて言葉を知らせるなど、思いを伝えられるように促す。	○ みんなで楽しい気持ちを共有できるようにする。

- 7 準 備 物
- ・ビンゴカード
 - ・班の名簿
 - ・たんけんバッグ、えんぴつ(児童)

保幼小連携・接続 交流指導案

- 1 日 時 令和5年10月27日(金)第2時限(9:40～10:25)
10月31日(火)第2時限(9:40～10:25)
- 2 学年・組 御幣島小学校 第5学年 1組 在籍40名、2組 在籍40名
香簍保育園 5歳児クラス らいおん組 在籍25名
御幣島幼稚園 5歳児クラス まつ1組 在籍25名、まつ2組 在籍25名
まつ3組 在籍23名、まつ4組 在籍25名

3 場 所 御幣島小学校 講堂

4 目 標

- 園児との交流をすることで、異学年の関わり方を見つけながら交流を楽しむ。
- 園児と一緒に過ごしたり、活動したりすることを通して、相手の気持ちを考えたり、自分のできることを進んで行ったりする力を育む。

5 展 開

子どもの活動	指導者(保育者)の支援		
	御幣島小学校	香簍保育園	御幣島幼稚園
○ はじめの会	○ 司会がスムーズにいくように支援する。		
○ グループ分けをして自己紹介をする。	○ 困っている児童には声かけをする。	○ いつもと違う活動に不安な姿や気持ちが高ぶる姿が予想されるので、個々に合わせて対応していく。	○ 困っている園児には自分の名前が言えるようにする。
○ 仲良しゲームをする。 ①「王様じゃんけん」 ②「御幣島小学校〇×ゲーム」	○ グループでゲームで話し合いが上手にいくように声かけする。	○ 児童の話を聞けるように声かけをする。 ○ 交流中は、児童と関わって過ごせるように見守っていく。 ○ ゲーム中は個々に応じてルールの説明をしたり、負けて悔しい気持ちを受け止めたり、高ぶる気持ちを落ち着けるように声かけをする。	○ 児童の話やルールをよく聞き、楽しめるように援助する。 ○ 話し合いを見守り、難しい内容の場合は、子どもたちが分かりやすいように言葉をかける。
③「じゃんけん列車」	○ 先頭の人のは後ろの人のことを考えてゆっくり進むように声をかける。		○ 先頭に選ばれた園児にはゆっくり進むよう言葉をかける。また、他児にもふざけて脱線しないように声をかける。
○ グループでふり返りをする。	○ 一緒に活動をして、楽しかったことやうれしかったことも、伝え合うように声かけをする。	○ ふり返りをする際には、発言が苦手な子には、声をかけ、気持ちを言葉で伝えられるように促す。	○ 感想や感じたことを自分の言葉で伝えられるように声をかける。
○ 全体でふり返りをする。	○ 交流をして、感じたことを発表するように声かけをする。		
○ おわりの会			

6 準 備 物

- ・王様じゃんけん(拡大版) (パソコン、プロジェクター)

3 Aブロックの研究のまとめ

研究に取り組むにあたり、まずはお互いを知るために、施設の保育内容や教育内容を見学したことで、今までは知っているつもりだったけれど、実際は知らないことの方が多かったことに気付いた。各施設の違いや共通していると感じたことを各施設の教職員間で話し合い、共通理解・認識ができた。話し合ったことを各施設に持ち帰って教職員で共有すると、さらに意識の改革ができ、各施設の壁がなくなったように感じた。

実際に各施設を見学して、就学前施設での活動内容が小学校での生活科と大差がないことが分かった。今まで知らなかったがゆえに、「1年生を早く小学生らしくしなくては」と思い接していたが、実際の子どもの育ちに合わせて緩やかに以前の生活から変化させていくことの大切さが分かるなど、教職員の意識が変わった。

コロナ禍での実践だったが、1年間連携した後の1年生は入学後、スムーズに学校になじめており、成果が表れていることが分かった。連携を通して今まで漠然としていたイメージが具体化され、不安が解消されたことが大きいようだった。

2年目の2年生との交流では、園児の生活の中で最も親しみやすい自然を通して交流をしたが、学校で見せる2年生の姿と5歳児との交流をする2年生の姿は、教職員が今まで気付かなかった優しさがああり、児童なりにどのように話せば園児が分かるかなどを考えている様子があった。また園児から「ありがとう」や「すごい」などと言われることで、嬉しそうにする様子もあり、児童が自信をもち過ごしている姿が見られるなど、互いに交流を通して育つ姿もあった。

5年生との交流では、何度か交流しビデオでも学校内の様子を見ていたので、学校の様子はよく分かっていて、楽しみにしている園児の様子がああった。「見たことがある」「知っている」ということが園児にとっては安心になり、小学校の児童は普段接することの少ない園児との交流を通して、「褒めてもらい」「頼ってもらい」ことで、自分たちが必要とされていることを実感し、社会性や自己肯定感が育ったように思う。

子どもたちが実際に社会に出たときに必要となる社会性やコミュニケーション能力の基礎となる部分を、生活科や交流活動を通して学べたことはとても有意義だと思う。

また、携わった教職員も具体的な5歳児、小学生の姿がイメージでき、普段とは違う子どもの姿や、交流後の子どもの姿の変化から感じるものがああったとの感想もああった。

この研究事業は2年間という限られた期間だったが、この2年間で学んだこと、得たことを基礎にして、今後もお互いが無理をせず当たり前にできるように、年間のスケジュールを組み、続けていけるようにしたい。

(記録：Aブロック教職員)

幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会の審議経過報告(令和4年3月31日)に「幼児期の教育と小学校以降の教育とを円滑につないでいくためには、子どもの成長を中心に据え、関係者の立場を超えた連携により、発達の段階を踏まえた教育の連続性・一貫性の基に接続期の教育の充実に取り組むことが必要である」とある通り、円滑な接続により、ぶつ切れにならない教育を実現していくことが重要である。

就学前児は、「それまでの経験を活かしながら新たな課題を発見し、新しい方法を考えたり試したりして実現しようとしていく時期」であるため、この時期にふさわしい、主体的・対話的で深い学びの実現を図るための理念の充実した教育の実現が必要である。このことから、Aブロックのテーマである、「子どもの良さをつなぐ連携・接続」はまさに基本であるといえる。

Aブロックの3施設では、以下の3点を意識して研究に取り組んだ。

- ①互いの保育・教育を知ることによって子どもの育ちを把握する。
- ②交流の意識を高める。(ビデオレター・オンラインで共有)
- ③キーワードは「安心感」。

互いを知り合うことを一歩目とし、人数、距離、時間を話し合い、案を出し合って「できること」を探り、関わる大人が主体的になることで学びの共同体となっていく。

Aブロックの2年生と5歳児の生活科での交流では、

- ・5歳児の学びとして、園と同じ生き物がいる(言葉による伝え合い)説明を受けて、花の特徴を知る(思考力の芽生え)、ビンゴゲームで丸の数を数える(数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)などが見られた。
- ・2年生の学びとして、自己肯定感(年下の子どもとの関わり)、客観的に自分を見つめなおす(年下の子どもをリードする立場に立って「先生いつも大変やったやろうな」と先生の思いに気付く)、思考力(ヒントを出す、それまでの経験を語る)などが見られた。

幼児期の終わりは自覚的な学びが芽生えてくる時期であり、集団の中での目標を意識し、自覚を育む活動が大切であること、3・4歳児で成功体験をたくさん重ね、5歳児以降は失敗からそれをどう乗り越えていくかを体験することが大切であると言える。しかし、小学校生活への適応を意識しすぎると、「座らせる」「文字を書かせる」など形にとらわれてしまう。

連携・接続を進めていくためには、以下の3点が重要になる。

- ・子どもの声に耳を傾け、子どもの発想を活かして実践を展開する。
- ・「できない」ではなく「できること」を探る。
- ・「やらなければ」ではなくまずは「面白そう・やってみよう」から始める。

今後、様々な園所や小学校がつながり、工夫を共有し、より良い姿と一緒に考えていくことが一層大切である。

5 参加者のアンケートから

- ・遊びの重要性を知り、「遊び込める子どもは学び込める」という言葉が心に留まった。地域で縦につながるものがとても少なくなっている実態から、この活動が良い効果を生むと思う。
- ・交流の動画を見て、子どもたちの笑顔が印象的だった。優しさがあふれていて見ていて心があたたかく、心を育てるには大切なことだと強く感じた。お互いを知ることからスタートすること、できることを考えて取り組むことで、とてもいい交流ができることをあらためて感じた。
- ・5歳児が不安を抱えたまま小学生になることと、少しでも不安が取り除かれてなるのでは、小学校生活への期待や意欲が全く違うと思うので、今後も子どもたちが入学後、楽しんで過ごせるきっかけをたくさんつくりたい。
- ・子ども同士だけでなく、大人同士が交流し、互いの教育・保育を知る機会をもつことで、小学校入学に向けてどのような保育を目指していくのかを考えることにつながると実感した。